

## 報 告

# 第 45 回国際生活時間学会 (IATUR) 東京大会参加報告

○福谷理恵\*1 藤原眞砂\*2

キーワード：生活時間研究、国際生活時間学会 (IATUR)、現代社会学、国際比較研究

## 1 はじめに

2023 年 11 月 27 日から 11 月 30 日までの 3 日間、第 45 回国際生活時間学会 (45<sup>th</sup> Conference of International Association for Time Use Research) が開催された (会場 東京都新宿区の京王プラザホテル)。参加者 (実行委員会含む) は 20 か国<sup>註1</sup>、約 100 名であった。IATUR 北東アジア理事の水野谷武志を実行委員長として、筆者らはこの大会の実行委員を務めた。本報告においては、生活時間研究及び国際生活時間学会の歴史を紹介した上で、今回の第 45 回東京大会の報告を行う。

## 2 生活時間研究と国際生活時間学会について

### (1) 生活時間研究について

私たちの 1 日は起床に始まって、身の回りの用事 (トイレ、洗顔、着衣等)、朝食、出勤、登校、仕事、学業、昼食、下校、退勤、買い物、家事、夕食、ラジオ聴取、テレビの視聴、スポーツ・レジャー活動、学習、余暇、交際、社会活動、ボランティア等のさまざまな行動から成り立っている。

生活時間研究は日記帳形式の調査票を配布し、行動の記録 (15 分ごとに 20 種類の行動の中から一つもしくは二つを選び 1 日 96 回記録) を被調査者に依頼し、回収・集計し、一日の各種行動の平均時間や時刻変化 (リズム、食事なら 3 度の放物線を描く) を観察し、生活の中に規則を見出し、政策的な含意を見出そうとするものである。時間研究は日記帳データから計上される平均時間や時刻別行為者率など加減乗除が可能な (社会科学の中では最良の) 比例尺度変数を活用できる。生活時間研究は男女別、年齢別、地域別、国別

などの横断的研究のみならず、縦断的研究を試みることが可能である。

例えば、産業化、都市化に伴う睡眠時間の短時間化、夜型化が長期の観測データ (NHK や総務省の全国調査データ) のもとに見出されている。またマスコミとの接触時間 (ラジオ、テレビ、新聞に使う時間) が衰退する一方で、ゲーム、SNS、YouTube の利用時間が増大する劇的な生活の変化も観察されている。女性の労働参加、共働き世帯の急増があるにも関わらず、家事・育児が従来どおり専ら女性に担われている、という家庭内の役割割り構造の実態も生活時間データにより明らかにされている。このことは、女性の負担軽減のために、男性の家庭参加が必要だとする認識の根拠となっている。このように、生活時間研究データは最先端の社会的関心に応える中立的かつ客観的な指標による情報源となっているのである。

1995 年の国連の北京国際女性会議では女性が果たして来た無償労働 (家事・育児) を貨幣的に評価し、女性の貢献の大きさを確認 (可視化) することの必要性が認識された。この認識に基づき、無償労働の価値評価 (「家事の値段はいくら?」) の仕方、それを基に国民経済計算の本体系の諸勘定では記録されない家事労働等の無償労働の価値を含む家計の生産活動に関するサテライト勘定 (「家計サテライト勘定」) が産出されるに至っている。サテライト勘定のためには、無償労働の時間単価と時間的規模 [家事・育児の時間数/日] が揃わなければならない。時間的規模に関しては無償労働時間を記録している生活時間調査データが活用されている。

\*1 至誠館大学 現代社会学部

\*2 島根県立大学 総合政策学部 名誉教授

北京会議を契機に生活時間調査が不可欠だとする強い認識が研究者、行政実務家の間で共有されるようになった。こうした動向はこれに取り組んで来た生活時間研究（者）に強い追い風となった。また生活時間研究者が中心となってきた学会 IATUR（後述）の存在価値も大いに高まった。国際間の人口、モノ、文化の交流の拡大、地球社会の「共時化」<sup>1)</sup>を背景に、IATUR を基盤とした研究交流はますます活発化している。

生活時間研究には計量的研究のみならず、われわれの日々の時間的、時刻的行動がどのような経緯で現在に至ったのかを歴史的に解明する研究もある。義務教育制度の普及（登下校時間、共通の時間割の普及）、企業組織の出退勤、就業時間等の規定、店舗の開閉時間、各種交通機関の普及、ダイヤ整備などは密接に連携して、われわれの生活時間の緻密化、標準化、一般化を促して来た。時間研究のテーマは広く、深い。

## （2）生活時間学研究および学会誕生の経緯

生活時間学会の誕生の経緯に関係した前史を紹介しておこう。淵源は科学的管理法の手法を考案し実践し、生産現場に近代化をもたらし、マネジメントの概念を確立したことで著名な F.テイラー（1856-1915）の研究である。彼は産業社会の新しい時間の概念に基づき、19 世紀末から 20 世紀の変わり目に工場の作業管理の合理化を図るために標準時間に基づく作業の効率化、「テイラーリズム」を提唱した。

### 1) 旧社会主義諸国のロシア（ソ連）・東欧での研究

テイラーの発想は、旧ソ連において合理的な計画経済を実施するために利用された。工場での仕事だけでなく生活全体にまで射程を拡げ、1924 年には労働者の時間研究が誕生した。この調査は生活時間調査らしい時間使用調査の始まりであると言われている。

### 2) 西側諸国（自由主義国家）における研究

同時代に、自由主義の国々においては「余暇とレジャー」という全く別の観点から時間使用に関心がもたれ、生活時間調査が行われるようになった。「放送」がメディアと娯楽を出現させた。ラジオ、テレビを放送

するためには、人々の生活に合わせて番組を編成する必要がある。イギリス放送協会（BBC）は、1939 年に視聴者の生活時間調査を実施した。これに触発され我が国でも NHK が 1941 年に国民生活時間調査（後述）を実施した。

旧社会主義と自由主義の国々では、全く異なる観点から生活時間調査が行われたのである。

## 3) 東西の研究の合流

1960 年代になるとハンガリーの社会学者 サライ（Szalai, A.）の主導によって東側諸国と西側諸国の両者による共同プロジェクトとして生活時間の国際比較研究プロジェクトが始まった。1964 年から 66 年にかけて、ベルギー、フランス、旧西ドイツ、アメリカ、ブルガリア、ハンガリー、ポーランド、チェコスロバキア、旧ソ連、ユーゴスラビア、旧東ドイツ、ペルーの 12 カ国において、生活時間の国際比較調査が行われた。このプロジェクトの核となったワーキング・グループは、1970 年のブルガリアの国際社会学会で時間研究の分科会を組織した。その後、ワーキンググループは 4 年に 1 度の国際社会学会世界大会の分科会と、中間年の 2 年に 1 度独自の会議を開いた。ワーキンググループは、1988 年以降は国際社会学会から独立して独自の国際学会 IATUR（International Association for Time Use Research：国際生活時間学会）を組織するようになった。IATUR は 1989 年からは毎年開催となった。年次大会では、新たな調査手法や分析手法、分析結果等が発表されている。IATUR は、生活時間に関する調査・研究に関心を寄せる人々が交流するための研究グループからフォーマルな研究組織となった。

現在、本部はベルギーのブリュッセルにある Vrije Universiteit に置かれている。IATUR のホームページによると、世界 40 カ国以上の国々のメンバーからなり、会員は、大学の研究者だけではなく、各国政府の統計局、国際機関、放送機関、民間企業の関係者から構成されている。

### 3 日本の生活時間研究

#### (1) NHK 国民生活時間調査について

日本におけるはじめての生活時間調査は、1941（昭和16）年から1942（昭和17）年にかけて日本放送協会（NHK）によって行われた。この時の調査対象は5万2000人にのぼる大規模調査であった。結果については、当時の緊迫した国内外の情勢により国家機密とされた。NHKの国民生活時間調査は1960（昭和35）年に再開されて以降、5年ごとに実施され現在に至っている。世界でこれほど長期にわたり定期的な調査を継続してきた調査機関はNHK放送文化研究所の他はなく、「そのモチベーションはいったいどこから」と世界中から敬意を払われている。

しかし、NHKの国民生活時間調査は、調査の目的が放送番組編成に置かれていたことから、人々の「ながら行動」<sup>註2</sup>を調査している。一つの時刻に2つの行動まで記録出来る調査票の型式は国際比較可能な調査票（サライ方式）と異なっており、他国との直接比較が困難という難点を抱えていた。

#### (2) 日本の労働科学、社会政策学と時間研究

日本における大学研究者による生活時間調査では、戦前から戦後にかけて労働科学の研究で活躍した藤本武によるものがある。藤本の研究は、日本国憲法第25条の「健康で文化的な最低限度の生活」の実態根拠となる最低生活費水準の科学的な測定に初めて成功した業績でも知られる。藤本は戦後も積極的に様々な生活時間調査を展開し、生活時間分類における労研方式あるいは藤本方式と呼ばれる独自の分類方法を開発した。生活時間を収入生活時間と消費生活時間に大きく区分し、消費生活時間を生理的生活時間、家事的生活時間、社会的文化的生活時間の3つに区分する方法は、今日でも最も有力な行動大分類方法として使用されている。また同時代の籠山京（社会政策学）の貢献も見逃せない。籠山（1985）は、平均時間値だけでなく時刻別の行動研究の重要性も示唆していた。

#### (3) 東京工業大学の原の松山調査について

先述のサライによる生活時間の国際比較プロジェクトに参加しなかった日本は、その後、当時の経済企画庁国民生活局による委託で東京工業大学の原芳男助教授（当時）の指揮のもと、1972（昭和47）年に愛媛県松山市の住民を対象としてサライ方式の国際比較調査と比較可能な調査を実施した。この「松山調査」の結果は、経済企画庁編（1975）『生活時間の構造分析—時間の使われ方と生活の質—』としてまとめられ出版されている。生活時間研究に大きな足跡を残した。

#### (4) 総務省社会生活基本調査の開始

松山調査を起点として、当時の総理府が1976（昭和51）年から「社会生活基本調査」という生活時間調査を行うようになった。社会生活基本調査は、総務省統計局により5年ごとに定期的な実施されており、その結果はホームページでも閲覧できる。総務省統計局のデータ活用は、現在では多くの研究者並びに公的サービスを目的とする行政機関や公共団体で活用されている。研究者はかつては集計済みの表を活用していたが、総務省政策統括官2007年「統計法（平成19年法律第53号について）」により、公益性のある学術研究等においても調査票データ（マイクロデータ）も活用ができるようになった。これにより、現在では、研究者が研究目的に合わせてマイクロデータを自ら集計し、研究分析する時代へと移り変わった。これは多変量解析の導入など生活時間研究に大きな質的変革をもたらしている。

### 4 日本で開催された二度の大会（松江、東京大会）

2023年の第45回国際生活時間学会（IATUR）東京大会はわが国では第2回目の開催であった。第1回目は2012年の第34回国際生活時間学会（IATUR）松江大会（2012）（実行委員長 藤原真砂）であった。

松江大会も東京大会も震災、疫病に阻まれ開催に至るまで紆余曲折があった。

#### (1) 2012年松江大会

松江大会は当初、東京での開催を予定していた。し

かし、2011年に東日本大震災があり、福島原発事故の影響で東京開催が危惧される状況に陥った。日本メンバー[元 IATUR 理事の平田道憲広島大学教授<sup>註3</sup>（本稿筆者 福谷の指導教授）、現水野谷理事、藤原（当時理事）]は IATUR 日本大会の開催地を東京から松江に急遽変更した。藤原は同年の 2011 年ロンドン大会の IATUR 理事会で会場変更を提唱し、承認を得た。学会員が集う翌日の総会で、松江大会開催が正式に決定された。

松江で大会を開催したことは成功であった。地元の松江市、島根県から会議誘致の補助金が得られ、余裕のある運営費を確保出来たからである。東京開催ならば運営費調達は困難を極めていたと思われる。欧米から遠く離れ、東京からも遠く離れた地方に会員がどれほど参加してくれるか不安であったが、杞憂であった。2023 年東京大会と同様の参加人数である 100 人近い（日本人参加者より海外参加者のほうが多かった）参加者が羽田や関西空港、JR の経由で松江を訪れた。学会の所期の目的である研究、親睦が果たせたのみならず、地方都市の豊かさ（宍道湖、松江城、由志園、ワイナリー）も楽しんでもらえた。開催にあたっては地元自治体の支援のみならず、NHK 放送文化研究所の協力も得てわが国が誇る国民生活時間調査、資料の展示を行った。総務省からは大会ポスター、ホームページにロゴの使用が承認され、大会に花を添えることとなった。

## （2）2023 年東京大会

2012 年の日本大会の実績、経験は、2023 年東京大会での日本再開催に寄与した。緒に就いたのはソウル大会（2016 年）であった。ソウルで総務省統計局の招致担当者から藤原（当時 IATUR 北東アジア担当理事）とキンバリー女史（当時 IATUR 事務局）<sup>註4</sup>に、IATUR の 2020 年大会に関して即開催国が決定しているかどうかの問い合わせがあった。藤原とキンバリー女史は「まだ決定していない」と答えた。

ソウルから帰国後、藤原は 2016 年 12 月に総務省統

計局に召喚された。総務省統計局の担当者から 2020 年に IATUR 会議を東京に招致するよう依頼があった。

総務省側からは次のような様々な便宜供与が提示された。

1. 会議会場と必要な家具や資材の設置
2. 会議中の昼食と飲み物
3. 統計部長が主催する夕食付きのレセプション1回
4. エクスカーション
5. 会議、レセプション、エクスカーションのスタッフ
6. 会議用の印刷物と文房具/事務用品

また、総務省統計局の財政支援により、

- A. 2012 年の第 34 回 IATUR 松江大会よりも会議費を大幅に安く設定できる。
- B. 発展途上国のメンバーや大学院生が会議に参加できるように支援できる。

断わる理由がない様々な財政支援が表明された。「会議参加者からの入場料（または会議、登録料）を使用する予定はありません。」との言葉もあった。

2012 年の松江大会の準備はすべて手作りであった。資金調達から会議受付デスクの設置、受付スタッフの準備、昼食、歓迎ディナーの会場設定、遠足のバスの手配等の準備、その他非常にたくさんの準備をした。それをすべて総務省が代行してくれるのだから、夢のようなサポートと言って良いものであった。

藤原は総務省の意向を IATUR の同僚に紹介し、再度の開催に強い意欲があるかどうか尋ねた。もちろん彼らは諸手の賛成であった。総務省提示の諸条件は IATUR の会長、理事に対し胸を張って会議誘致を語り掛けることができる内容であった。

翌年の 2017 年スペイン、マドリッドで大会があった。藤原は上記の総務省の便宜供与の内容を藤原研究室の英語のスペシャリストの玉置悦子氏（島根県立大学社会学博士）に依頼して英訳原稿を作成してもらい、

2017 年 7 月に会長、理事が出席する IATUR 理事会で説明し、開催承認の賛同を得た。総会で正式に承認され、日本で 2 度目の大会が念願の東京で開催されることになった。なお東京大会の準備については 2017 年 12 月以降は水野谷氏が実行委員として務めることになった。

会場の京王プラザホテル東京は総務省統計局がこれまでに主催してきた国際会議でのノウハウがあるために選定された。しかし、実際に開催に至るまでには多くの苦労を経ることとなった。具体的には、コロナ禍により 2020 年の大会は中止となり、その後、学会理事会で調整の結果、2023 年に開催となった。

## 5 大会プログラム

第 45 回国際生活時間学会 (IATUR) 東京大会における研究発表では、3 つのプレナリーセッションで計 8 本、パラレルセッションで計 58 本、ポスターセッションで計 7 本、合計で 73 本の発表が行われた。以下、大会プログラムを示す (福谷らによる日本語訳も付記する)。

なお藤原は、ポスターセッションにて "Activity Rates Approach : Methods and Findings" として 11 月 29 日に発表した。藤原が年来開発してきた時刻別行為者率アプローチを紹介した。

### **PLENARY SESSION 1: Modern ways to collect time use data, 11:30am- 1:00pm 28th Nov.**

**全体会議 1 : 生活時間データを収集する最新の方法**

**Chair: Theun Pieter van Tienoven**

Centre for Time Use online time use diary tool

生活時間研究センター オンライン生活時間ダイアリーツール

*Oriel Sullivan, Jonathan Gershuny, Juana Lamote de Grignon Pérez*

Simultaneous Behaviours and Time Use: An Application of the Experience Sampling Method in Time-Use Survey in Japan

ながら行動と時間使用 : 日本における生活時間調査における経験サンプリング法の適用

*Kenji Ishida*

Designing, creating, and conducting the International Association's Time Use Survey (IATUS) through MOTUS MOTUS による国際協会の生活時間調査 (IATUS) の設計、作成、実施

*Theun Pieter van Tienoven*

### **PLENARY SESSION 2: Time Use research in the field of civil and environmental engineering, 9:30am- 11:00am 29th Nov.**

**全体会議 2 : 土木および環境工学分野における生活時間研究**

**Chair: Yoko Shimada**

Time use research in the field of transportation planning

交通計画分野における生活時間研究

*Mamoru Taniguchi, Sumiko Ishibashi*

Time use research in lifestyle analysis for decarbonization

脱炭素化に向けたライフスタイル分析における生活時間研究

*Yuko Kanamori*

Time use research in evaluation of residents' health risk caused by environmental contamination

環境汚染による住民の健康リスク評価における生活時間研究

*Yoko Shimada*

**PLENARY SESSION 3: Time use research in East Asian countries, 9:30am- 11:00am 30th Nov.**

**全体会議 3 : 東アジア諸国における生活時間研究**

**Chair: Takeshi Mizunoya**

Gender and time use in East Asian and Western societies, 1980s - 2010s

1980 年代~2010 年代の東アジアおよび西洋社会におけるジェンダーと生活時間

*Man-yee Kan*

Sleep, Study and Unpaid Work in Korea

韓国における睡眠、学習、無償労働

*Ki-soo Eun*

**POSTER SESSION, 11:00am - 11:30am 29th Nov. and 30th Nov.**

**ポスター セッション**

Exploring the Link Between Unemployment and Accelerated Transition to Motherhood: A Study on Unemployed Women in Germany

失業と母親になることへの移行の加速との関連性を探る : ドイツの失業女性に関する研究

*Ziihal Arikan*

Parents' Nonstandard Work Schedules and Child Lifestyles: An Analysis of the Japanese Longitudinal Survey of Newborns in the 21st Century 2001 Cohort

親の非正規雇用勤務のスケジュールと子どものライフスタイル : 日本の縦断調査の分析 21 世紀の新生児 2001 コホート

*Akiko S. Oishi*

Social determinants and measurement of adolescent

moderate-to-vigorous physical activity: Comparing survey, time-diary and accelerometer data using structural equation modelling

思春期の中程度から激しい身体活動の社会的決定要因と測定 : 構造方程式モデリングを使用した調査、生活時間ダイアリー、加速度計データの比較

*Elena Mylona, Oyinlola Oyeboode, Richard Lampard, Raphael Dimitriou*

Activity Rates Approach : Methods and Findings

行為者率アプローチ : 方法と結果

*Masago Fujiwara*

User driven data collection design

ユーザー主導のデータ収集設計

*Elisabeth Rønning, Nina Berg, Gezim Seferi*

Time Reveals Everything. A glimpse into the hourglass of time use research.

時間はすべてを明らかにする : 生活時間研究の砂時計を垣間見る

*Theun Pieter van Tienoven, Joeri Minnen, Bram Spruyt*

The MOMENT of special justice. Mapping gendered perceived safety and the use of public spaces in Brussels, Belgium.

空間的公平性の重要性について : ベルギーのブリュッセルにおける、性別による安全性の認識と公共スペースの使用のマッピング

*Petrus te Braak, Theun Pieter van Tienoven*

**PARALLEL SESSION 1, 2:30pm- 4:00pm 28th Nov.**

**パラレルセッション 1**

**Sociodemographics of time allocation 1,**

**時間配分の社会人口統計 1**

**Chair: Jiweon Jun**

A Comparative Analysis of Care Time Allocation in Korea and Canada

韓国とカナダにおける介護時間配分の比較分析

*Jiweon Jun, Ito Peng*

Disparities in Lone Time Patterns Among Older Adults in Urban and Rural China: A Sequence Analysis Approach

中国の都市部と農村部の高齢者の孤独な時間パターンの格差：シーケンス分析アプローチ

*Liu, Yongye; Zhou, Muzhi*

Gender inequalities in time-use between cohabiting and married individuals: Evidence from the South African Time-Use Survey

同居者と既婚者の間の生活時間における男女不平等：南アフリカ生活時間調査

*Odile Mackett*

**COVID-19 impact on time use 1,**

**COVID-19 による時間利用への影響 1**

**Chair: Tomomi Shinada**

Anxious Times or New Meanings? Analyzing Nuances of Fathers' and Mothers' Emotional Experiences in Daily Activities in the COVID vs. Pre-COVID Eras

不安な時代か、それとも新しい意味か？ COVID 時代と COVID 以前の時代における父親と母親の日常活動における感情体験のニュアンスの分析

*Melissa Milkie, Sarah Flood, Liana Sayer, Kelsey Drotning*

Big changes in daily activities across the course of the UK pandemic; but which of them will stick?

英国のパンデミックの過程で日常活動に大きな変化が

見られたが、どのようなあり方が定着するかの推測

*Juana Lamote de Grignon Pérez, Oriel Sullivan, Marga Vega*

*Rapun, Jonathan Gershuny*

**Gender inequalities in use of time 1,**

**時間使用におけるジェンダー不平等 1**

**Chair: Jennifer Whillans**

A Study on the Extent of the Socialization of Housework and Couples' Housework Time

家事の社会化の程度と夫婦の家事労働時間に関する研究

*Wenjia Hao*

A typology of women's work schedules in the UK

英国における女性の勤務スケジュールの類型

*Jennifer Whillans*

Life Tracker: A Simulated Approach for Analyzing Gender inequality in Unpaid Working Hours

ライフ トラッカー：無償労働時間における男女不平等を分析するためのシミュレーション アプローチ

*Kiyomi Shirakawa*

**Work, health, safety and labour relations policies 1,**

**労働、健康、安全、労使関係政策 1**

**Chair: Petrus te Braak**

Limited time for patient-doctor interaction at the bedside: shared perceptions between patients and doctors

ベッドサイドでの患者と医師の対話の時間は限られている：患者と医師の共通認識について

*Young Kyung Do, Sun Young Lee, Un-Na Kim, Jae-Joon Yim, Hyeontaek Hwang, Yukyung Shin, Youngsuk Kwon*

How Japan Teacher's Union used the Time Use Research of Female teachers for advocating the Child-care Leave Law in 1975

日本教員組合が 1975 年の育児休業法の推進を訴えた  
女性教師の生活時間をどのように活用したのかに関する調査

*Chisato Atobe*

Teachers' time poverty uncovered through time-diaries: The  
relevance of time allocation rather than the duration of  
working hours to teachers' well-being.

タイムダイアリーから明らかになった教師の時間貧  
困：勤務時間の長さではなく時間配分が教師の幸福に  
関係する点について

*Petrus te Braak, Theun Pieter Van Tienoven*

## PARALLEL SESSION 2,

### パラレルセッション 2

#### Caregiver and use of time,

#### 介護者と時間の使い方

**Chair: Hyuna Moon**

Unveiling the Hidden: Enhancing Measurement of Care  
Activities through Caregiver-Focused Time Use Diaries

隠れたものを可視化できるようにする：介護者に焦点を  
当てた生活時間ダイアリーによる介護活動の測定強化

*Jiweon Jun, Minseok Kang, Bora Yeon*

Analysis of Actual Time Use in the lives of Working  
Caregivers

働く介護者の実際の生活時間分析

*Shinichi Nagao*

Work-Life Balance and Caring Masculinities: Insights from  
Male Caregivers in Korean Society

ワーク・ライフ・バランスと思いやりのある男性らし  
さ：韓国社会の男性介護者からの洞察

*Hyuna Moon, Ki-Soo Eun*

#### Time use for program or public policy evaluation,

#### プログラムまたは公共政策の評価のための生活時間 研究

**Chair: Kristine West**

Does the Reduction of Working Hours Promote or Constrain  
Residents' Consumption A Natural Experiment of Working  
Hours Adjustment in China

労働時間の短縮は住民の消費を促進するか抑制する  
か：中国における労働時間調整の自然な状況での実験  
*Na Liu, Jing Li*

Effect of access to daycare on parental time use: Evidence  
from a free community daycare intervention in rural  
Bangladesh

デイケアへのアクセスが親の生活時間に与える影響：  
バングラデシュの農村部における無料のコミュニティ  
デイケアの場合

*Sneha Lamba*

Impacts of Marriage Equality on Time Use

結婚の平等が生活時間に与える影響

*Kristine West, Melody Kosbab, Mollie Pierson*

#### Gender inequalities in use of time 2,

#### 時間使用におけるジェンダー不平等 2

**Chair: Trinidad Moreno**

A blessing and a curse? Housework and women's relative  
academic attainment in Colombia

コロンビアにおける家事と女性の相対的学業達成度  
について

*Trinidad Moreno*

Couples' Recent Time Use Trends in Terms of Housework and Working Hours in Japan : Towards Comparative Analyses Between Before and After the Recent Pandemic

日本における家事と労働時間に関する最近の夫婦の時間使用傾向：最近のパンデミック前後の比較分析に向けて

*Masao Takahashi*

Gender Differences in Housework among Solo Households across Gender Regimes

ジェンダー体制を横断した単身世帯の家事における男女差

*Hao-Chun Cheng, Liana C. Sayer*

**PARALLEL SESSION 3, 11:30am - 1:00pm 29th Nov.**

**パラレルセッション 3**

**Gender inequalities in use of time 3,**

**時間使用におけるジェンダー不平等 3**

**Chair: Marta Marszalek**

Women's Unpaid Work in India: Insights from the National Time Use Survey

インドにおける女性の無償労働：全国生活時間調査からの洞察

*Ellina Samantroy Jena*

How much is it cost: care of one, two or more children? Sharing time in sustainable family and society : example of Poland

1人、2人、またはそれ以上の子どもの世話にはどれくらいの費用がかかるか？ 持続可能な家族と社会における時間の共有：ポーランドの例

*Marta Marszalek*

**Sociodemographics of time allocation 2,**

**時間配分の社会人口統計 2**

**Chair: Roxanne Connelly**

Social class inequalities in Increasing Childcare Time

育児時間の増加における社会階級の不平等

*Tomo Nishimura*

The Impact of Fatherhood on Men's Paid Work and Child Care in Contemporary Korea: An Analysis of 2019 Korean Time-Use Survey

現代韓国における父親であることの男性の有償労働と育児への影響：2019年韓国生活時間調査の分析

*Eun-hye Kang, Ki-Soo Eun*

The Social Structure of Work Time Patterns in the United Kingdom: A comparison of seven-day work schedules in the 2000-01 and 2014-15 United Kingdom Time Use Surveys.

英国における労働時間パターンの社会構造：2000-01年と2014～15年の英国生活時間調査における7日間労働スケジュールの比較

*Roxanne Connelly, Stella Chatzitheochari*

**Work, health, safety and labour relations policies 2,**

**労働、健康、安全、労使関係政策 2**

**Chair: Takeshi Mizunoya**

Economic activity of household members and the size of the shadow economy. The case of Poland and Turkey.

世帯員の経済活動とシャドウ経済の規模：ポーランドとトルコの事例

*Przemysław Garsztka, Jacek Jankiewicz*

How and why parental nonstandard work schedules affect children's outcomes

親の非正規雇用の勤務スケジュールが子どもに如何に  
影響するか

*Yuko Nozaki*

Trends in Work Time in France, 1985-2010: a Decomposition  
Approach

1985～2010 年のフランスにおける労働時間の傾向:分  
解アプローチ

*Laurent Lesnard, Boulin Jean-Yves*

**Gender inequalities in use of time 4,**  
**時間使用におけるジェンダー不平等 4**

**Chair: Hyejoong Kim**

Long-Term Changes in Work-Life Balance in Japan

日本のワーク・ライフ・バランスの長期的変化

*Tomoe Naito*

Dual-earners' synchronization of housework and childcare

共働き世帯の家事と育児の同時行動

*Hyejoong Kim, Meejung Chin*

Feelings of time pressure despite leisure time? Exploring the  
effect of different time use and leisure time characteristics on  
subjective time pressure

余暇時間があるにもかかわらず、時間的なプレッシャ  
ーを感じている？ 異なる時間の使い方と余暇時間の特  
性が主観的なタイムプレッシャーに与える影響の調査

*Francisca Mullens, Petrus te Braak*

**PARALLEL SESSION 4, 2:30pm- 4:00pm 29th Nov.**

**パラレルセッション 4、11 月 29 日午後 2:30 ～  
4:00**

**Sociodemographics of time allocation 3,**

**時間配分の社会人口統計 3**

**Chair: Lyn Craig**

Gendered returns to education in Australia: the role of time  
and temporalities

オーストラリアにおける教育の性別役割分業感への回  
帰について：時間と変化流動性の役割

*Lyn Craig, Rebecca Valenzuela, Signe Ravn, Brendan  
Churchill*

Grocery shopping and access trips in the Canadian time use  
surveys

カナダの生活時間調査における食料品の買い物とアク  
セスへの移動

*Yousefzadeh Barri Elnaz, Lachapelle Ugo, Widener Michael*

Into the Deepest of the Night: A Longitudinal Analysis of  
Young Adults in Taiwan

台湾の若者の生活時間に関する縦断的分析

*Ming-Chang Tsai*

**Time use research methodologies,**

**生活時間研究方法論**

**Chair: Jacek Jankiewicz**

A comparative study on the measurement of the size of  
informal economy through Time Use and Budget Surveys

生活時間と予算による非公式経済の規模の測定に関す  
る比較研究調査

*Armagan Aktuna Gunes*

Production and Consumption in the Non-Market Sphere:

Agent's Opportunity Cost of Time Estimations

非市場領域における生産と消費：エージェントの時間  
推定の機会費用

*Jacek Jankiewicz, Przemysław Garsztka*

Temporal welfare positions: definition, operationalisation and measurement of a non-material understanding of welfare: a systematic literature review

時間的福祉ポジション：福祉の非物質的理解の定義、運用化、測定：体系的な文献レビュー

*Gerrit von Jorck, Franziska Dorn*

**SDGs and time use policies,**

**SDGs と生活時間政策**

**Chair: Juana Lamote de Grignon Pérez**

Detailing household time use in an input-output database for climate footprint estimation

気候の影響の及ぶ地域推定のための入力出力データベースにおける世帯の生活時間の分類項目

*Sofia Topcu Madsen, Bo Pedersen Weidema, Jonathan Gershuny*

The Global Human Day: Human Activities and the Earth System

グローバル・ヒューマン・デー：人間の活動と地球システム

*William Fajzel, Eric Galbraith, Christopher Barrington-Leigh, Jacques Charmes, Elena Frie, Ian Hatton, Priscilla Le Mézo, Ron Milo, Kelton Minor, Xinbei Wan, Veronica Xia, Shirley Xu*

Using time use diaries to measure child labour

生活時間ダイアリーを用いた児童労働の測定

*Juana Lamote de Grignon Pérez, Tanay Kondiparthi, Margarita Vega Rapún, Palin Supradit Na Ayudthaya*

**Gender inequalities in use of time 5,**

**時間使用におけるジェンダー不平等 5**

**Chair: Sneha Lamba**

Childcare and Housework-Related Time Spent by Husbands and Wives Regarding Number of Children

夫と妻の育児と家事関連時間における子どもの人数との関連

*Mari Nakamura*

Gender differences in time use among couples in rural Bangladesh: Does women's decision-making autonomy play a role?

バングラデシュの農村部のカップルの生活時間における男女差：女性の意思決定の自主性が役割を果たしているか

*Sneha Lamba*

Gender, Time Poverty and Access to Social Protection: A Time Use Analysis of Women Workers in India

ジェンダー、時間的貧困、社会保障へのアクセス：インドの女性労働者の生活時間分析

*Priyanka Chatterjee, Ellina Samantroy Jena*

**PARALLEL SESSION 5, 11:30am - 1:00pm 30th Nov.**

**パラレルセッション 5**

**Gender inequalities in use of time 6,**

**時間使用におけるジェンダー不平等 6**

**Chair: Ignace Glorioux**

A Sign of Change in Japanese Men's Housework: Focusing on Changes in Men in Their 40s

日本の男性の家事労働の変化の兆し：40代男性の変化に焦点を当てて

*Akihiro Hirata*

Gender inequalities in the use of time in Vietnam: results from the 2022 Vietnam time use survey

ベトナムにおける生活時間におけるジェンダー不平等：2022 年ベトナム生活時間調査の結果

*Ignace Glorieux*

Gender inequality in household labor division: cross-national comparison

家事労働分担におけるジェンダー不平等：国際比較

*Maria Nagernyak, Natalia Mikhailova, Natalia Voronina, Sergey Ter-Akopov*

#### **Sociodemographics of time allocation 4,**

##### **時間配分の社会人口統計 4**

**Chair: Phanwin Yokying**

Social Exclusion, Gender Inequality, and Time Use: Mixed-Method Evidence from Nepal

社会的排除、ジェンダー不平等、生活時間：ネパールの混合法によるエビデンス

*Phanwin Yokying, Mukta Lama Tamang*

Time allocation and wellbeing in later life: The case of Italy  
老後の時間配分と幸福：イタリアの事例

*Annalisa Donno, Maria Letizia Tanturri*

Who works in non-standard work schedule and how do they change in Japan over the last 20 years?

日本では誰が非正規雇用の勤務スケジュールで働いているのか。過去 20 年間の変化

*Takuya Hasebe*

#### **Gender inequalities in use of time 7,**

##### **時間使用におけるジェンダー不平等 7**

**Chair: Shen Ke**

Has Europe moved toward a leisure society? An analysis of gender and parental Leisure trends

ヨーロッパは余暇社会へと向かっているか？ ジェンダーと親の余暇傾向の分析

*Anna Martinez Mendiola*

How Does Hidden Contribution in Unpaid Work Reshape Our Understanding of China's Economy?

無償労働の隠れた貢献は中国経済に対する私たちの理解をどのように変えるのか？

*Shen Ke, Wang Feng, Cai Yong*

Changes in Time and Gender Ideology of Men and Women in the Child-rearing Period

子育て期の男女の時間観とジェンダー観の変化

*Mami Fujiwara*

#### **PARALLEL SESSION 6, 2:30pm- 3:30pm 30th Nov.**

##### **パラレルセッション 6**

#### **COVID-19 impact on time use 2,**

##### **COVID-19 が時間の使い方に与える影響 2**

**Chair: Juha Haaramo**

Time wealth between shift work and trust-based working time : A comparative real lab study before and after the Covid19 pandemic

シフト勤務と信頼に基づく勤務時間の間の時間的豊かさ：COVID19 パンデミック前後の実際の比較研究

*Gerrit von Jorck*

Time use and screen time in the covid years 2020 to 2021

2020 年から 2021 年の COVID-19 の時代における生活時間とスクリーンタイム

*Juha Haaramo*

### Labor supply and use of time ,

労働供給と時間の使い方

Chair: Jongsung Kim

SNAP recipients' labor supply in the presence of children in households

家庭に子どもがいる場合の SNAP 受給者の労働供給

*Jongsung Kim*

Home and away? Differences in time use between teleworkers and commuters

家と外出? テレワーカーと通勤者の生活時間の違い

*Juana Lamote de Grignon Pérez, Oriel Sullivan, Margarita Vega Rapún*

### Perceptions on time use, free time and time crunch,

生活時間の視点から、自由時間、時間不足に関する研究

Chair: Theun Pieter van Tienoven

Demonstrating construct validity and reliability of an eight-item experienced time pressure scale in nine large studie

9 件の大規模研究における 8 項目のタイムプレッシャー経験尺度の構成妥当性と信頼性の実証検討

*Theun Pieter van Tienoven, Petrus te Braak, Joeri Minnen, Francisca Mullens, Ignace Glorieux*

Leisure Time for Married Couples in Japan, Based on the Results of the 2021 and 2016 Japanese Survey on Time Use and Leisure Activities

2021 年と 2016 年の日本の生活時間:余暇活動に関する調査結果に基づく日本の夫婦の余暇時間

*Mariko Sakurai*

## 6 第 45 回 IATUR 東京大会の様子

以下、筆者（福谷）が撮影した大会の写真である。



ガラスに映った理事会の様子と窓から見える東京都庁と東京の夜景（11/27）



歓迎レセプション（11/28）



開会式後の集合写真（11/28）



歓迎レセプション：Gershuny 教授と筆者ら（11/28）



パラレルセッション会場（11/29）



プレナリーセッション会場（11/28）



ミニ東京ツアー（11/30）

総務省統計局の全面的なサポートにより、大会関連の一連の日程（ワークショップ、ランチ、歓迎レセプション、懇親会（屋形船）、ミニ東京ツアー（浅草）、大会後の鎌倉ツアーなど）は、細心の気配りとともに素晴らしい運営で執り行われた。大会会場はホテルの42階フロア全体を貸し切りで行われたことにより、参加者は迷うことなく会場を移動することができたうえ、高層階から一望できる東京の景観はすばらしいものであった。そして何より、コロナ禍で分断された閉塞的な状況から、再びこうして直接対面で大会が行われたことに、参加者は皆、感動を覚えた大会となった。

## 7 まとめ

本大会は、コロナ禍明けの最初の国際大会ということもあり、研究者同士が直接会って話し合い情報交換することの意義を再確認できた国際大会であったと言える。オンラインではわからない互いの人柄の機微、情報交換などのコミュニケーション、異文化に触れる喜びなど、「直接」その地に赴いて会って話し合うことの大切さを再確認できた参加者の感動が伝わる大会であった。

なお、第45回国際生活時間学会東京大会を機に、この大会での実行委員会であったメンバー（五十音順に；品田知美，島田洋子，平井太規，福谷理恵，藤原真砂，水野谷武志）にて、2025年3月より日本生活時間研究会（JSTUR；Japan Society for Time Use Research）を立ち上げる運びとなった。日本国内での生活時間研究者の交流機会をもち、国際的な研究にもアクセスしやすい土壌づくりの活動が開始されたわけである。生活時間研究に関心のある方には、是非ともアクセスしていただきたい。

## 【謝辞】

本報告をまとめるにあたり、ご協力くださった皆様に深く感謝申し上げます。

## 【註】

註1 大会実行委員会資料によると、インド、英国、オーストラリア、韓国、カナダ、スペイン、中国、デンマーク、ドイツ、日本、ノルウェー、ハンガリー、フィンランド、フランス、ポーランド、南アフリカ、米国、ベルギー、ロシアなどからの参加を確認できた。

註2 何かをしながら同時に何かをやる行動を指す。  
ex. テレビを見ながら洗濯をする（テレビが主行動・洗濯が「ながら行動」など）。

註3 1972（昭和47）年の「松山調査」において、東京工業大学の原義男助教授（当時）の指揮のもと、実際に調査に当たった研究者の一人であり、原の直弟子にあたる。

註4 当時 IATUR 事務局を運営していた Oxford 大学の Kimberly Fisher 准教授のこと。

## 【引用文献】

1) 矢野真和（1995）『生活時間の社会学—社会の時間・個人の時間—』東京再学出版会，17

## 【参考文献】

- 1) 遠藤理恵（2013）「第34回国際生活時間学会参加報告」『生活経営学研究』48，63-64
- 2) 箆山 京（1985）「第4章生活時間調査」『箆山京著作集第4巻生活調査』ドメス出版
- 3) 藤原真砂（2013）「国際生活時間学会」『よろん』111，83-88
- 4) 藤原真砂（2014）「生活時間調査」（一般社団法人社会調査協会『社会調査事典』）丸善出版，362-363
- 5) Fujiwara Masago, Hirata Michinori（2007）“Toward a General Approach to International Comparison of Time Use Data: Canadian White-collar Workers and Japanese White-collar Workers”, *Shimane Journal of Policy Studies*, 13, 105-122

- 6) IATUR and Statistics Bureau of Japan (2023) "45<sup>th</sup> International Association for Time Use Research Conference Program"
- 7) IATUR (2024) 「IATUR ホームページ」  
<https://www.iatur.org/> (アクセス日 2024. 8. 24)
- 8) 経済企画庁国民生活局国民生活調査課編 (1975)  
『生活時間の構造分析－時間の使われ方と生活の質－』大蔵省印刷局
- 9) 水野谷武志 (2010) 「国際生活時間学会第 32 回大会 (フランス・パリ)」『統計学』99, 47-50
- 10) 水野谷武志 (2023) 「第 45 回国際生活時間学会東京大会の終了報告」『経済統計学会労働統計研究部会報』50, 139-146
- 11) 総務省統計局 (2007) 「統計法 (平成 19 年法律第 53 号) (抄)」  
<https://www.stat.go.jp/info/kenkyu/kouhou/pdf/4-2.pdf>  
(アクセス日 2024. 9. 16)
- 12) 総務省統計局統計調査部労働力人口統計室 (2024)  
「国際生活時間学会 (IATUR) 第 45 回大会の概要－社会生活基本調査をめぐる議論を中心に－」  
『統計』75 (5), 41-45
- 13) 総務相統計局 (2023) 「国際生活時間学会第 45 回大会」  
<https://www.stat.go.jp/info/meetings/conferences/iatur45.html> (アクセス日 2024.10. 7)
- 14) 総務省 (2023) 「国際生活時間学会第 45 回大会の開催」  
[https://www.soumu.go.jp/menu\\_news/s-news/01toukei01\\_02000125.html](https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01toukei01_02000125.html)  
(アクセス日 2024.10. 7)
- 15) 鷺谷 徹 (2002) 「藤本武博士と労研」『労働科学』78 (4), 186-188
- 16) 矢野眞和 (1995) 『生活時間の社会学－社会の時間・個人の時間－』東京再学出版会
- 17) 矢野眞和 (1976) 「生活時間研究－その適用と展望－」『社会教育学研究』31, 142-220
- 18) 矢野眞和 (2006) 「『社会生活基本調査』への期待－生活時間と生活の質－」『統計』57 (7), 2-6